

第33回日本国際保健医療学会学術大会の印象

公益財団法人結核予防会

代表理事 石川 信克

国際保健と女性

本大会は平成30年12月1～2日、三砂ちづる氏を大会長として津田塾大学で開催された。三砂氏は元々薬学出身だが、ロンドン大学大学院で疫学を専攻した疫学者であり、南米の母子保健プロジェクトでは母子保健専門家としての経験も深く、また作家としての顔も持つユニークな方である。本学会は主テーマとして女性に焦点が当てられ、働き手と対象の両面からこの課題に迫る。シンポジウムでも女性のキャリアとしての国際保健、女性と子供の尊厳、出産の現場から、SDGsにおける保健とジェンダー、出産のヒューマナイゼーション（人間的な出産）などが取り上げられた。

特別講演は、京大野生動物研究センター伊谷原一氏が大型類人猿ボノボの生態学的観察に基づく「父系母権の社会」という内容で、ボノボはチンパンジーと対照的で、オスとメスは対等あるいはメスの方が優位のことが多く、非敵対的の平和な集団間関係を築いている。人間社会の成立と進化を考察し、「チンパンジーの残虐性とボノボの寛容性を併せ持ったのがヒト」という考察が印象的であった。

他分野にわたる発表

国際保健と疫学のシンポジウムでは、アンゴラでのタブレットを使った調査方法が紹介された。訪問した患者の家の位置がGPSで記録され、写真も撮れるので、仮にその患者さんが移動しても追跡が可能であったという経験は、インフラの整備されていない地域でのハイクを利用した方法として興味深い。

一般演題では、国内も含めアジア・アフリカ諸国の様々な途上国での多分野多視点にわたる活動や研究報告がされた。感染症、母子保健、プライマリーヘルスケア、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）、学校保健、難民、外国人の健康など幅広い発表がなされたが、喫煙・飲酒、生活習慣病、高齢化問題などの課題も注目された。

結核研究所の疫学グループによる報告で、結核患者の国際医療連携（患者の帰国に伴う治療の継続等）、ケニアのUHC、フィリピン結核患者の禁煙プログラムの効果などがあった。



学会プログラム表紙（写真 長倉洋海氏）

先輩たちの経験談

基調講演では中村安秀氏が「Development という幻想」を語る。小児の発達、行きつ戻りつを繰り返すの中から次元を飛躍するという観察に基づき、途上国の地域の住民たちのしたたかな歩みや発展を対比させ、一方的な開発という掛け声でなされるグローバルな目標の持つ浅はかさや傲慢さに疑問を投げかけた。

喜多悦子氏は、自らの国際保健の道程の中で、アルマ・アタ40周年の節目に、PHCの骨子を草稿されたジョンズホプキン大のカール・テラー教授との心温まる人間的な出会いを述べられたのが印象的であった。

筆者は、保健医療協力40年の経験から、専門家を目指す若い人々に向けた講演をした。まずは先人や友人たちから学び、現場の活動の中で学び、国際戦略との関わりから学び、限りなく変遷して行く政治や保健ニーズに対して、現場にできるだけ近く接しながら学び続けることが大切と述べた。また本学会で今後議論すべき課題として、健康で安全な社会づくり（地域社会や人々のエンパワメント）、安全な環境づくり（特に福島原発災害を国際保健の課題として行く必要）、健康の最大の敵である戦争の持つ健康破壊、人間社会や人間性の破壊なども含めた、平和の推進や社会正義に向けた理念の追求、などの必要を訴えた。

結核予防会の友人たちの活躍

結核予防会に連なり、世界の各地で活躍されている友人達との再会も嬉しいものであった。結核予防会ザンビア事務所の松岡さん（質的研究法）、マニラ事務所のアウイさん（患者の禁煙支援）、10年前にザンビ

プロジェクトを立ち上げ、フランスの国際機関で働く堀井さん（ニジェールの母子保健）、ザンビアで長く働き、最近英国で博士号を取った座間さん（ザンビア鉱山労働者）、国際栄養の研究をしているコウさんなど、それぞれから最近の活躍の様子を聞くことができた。

結核予防会は、長期にわたる国際研修、アフリカやアジア諸国でのプロジェクトや調査研究を実施しており、本学会でも設立当初から重要な役割を果たしてきた。今回の大会でも活動の一部は発表されたが、もっと報告できるものがあったと反省する。🐼



会場となった津田塾大学